

## マルクス主義経済哲学原理

梯 明 秀

## は し が き

マルクス主義経済哲学原理というばあい<sup>(一)</sup>、はたして何を、それがいみしているかということが問題になる。さらに、そのままに哲学の原理という言葉そのものが、一見して理解しやすいものに受けとれて必ずしもそうではなく、いな、そうあつてはならないと思われる。もともと哲学とは、諸学の原理を窮極まで追求すべき学問であり、したがつて諸科学にたいしても、その方法論的原理なり思想的立場なりを解明することを、自らの使命としてゐるはずである。したがつて、社会科学の一つとしての経済学を、その根底に秘めている思想的立場ないし世界観において、この特殊科学が成り立つための方法論的原理を追求することが、一般に経済哲学と呼ばれうる学問の本質的規定になつてゐるはずである。そこで、このような使命を、すでに言い表している経済哲学なる言葉に、さらに、この言葉の本質的意味であるところの原理<sup>(二)</sup>という文字を附加することは、一つの同義反復であつて、不必要な冗言であり、ときとしては、術学的な権威づけでないかの譏りをまぬがれないであろう。しかしながら哲学の領域において、その思想内容が体系的に展開されるばあひには、あるいは、哲学をもつて体系的学問

でなければならぬとする立場にあつては、この体系が抛つてもつて展開されるための根拠が追求され、この根拠が原理となつて思想の自己展開をみちびき、この思想の体系的發展の全体を貫いていることを、何よりも重要視しなければならぬのである。このいみでは、哲学原理という言葉は、けつして単なる同義反復ではなく、むしろ哲学の領域における関心の焦点が何ものであるかを明示しているものであるとすることもできるであろう。さらに経済哲学原理というばあいも、経済科学の方法論を原理的に追求する特殊な哲学の、右に述べた体系的原理についてのみ、関心の焦点を合せているのだと理解することができるとも、このばあい経済哲学原理という言葉が、経済科学の原理というようなトウトロジーにおちいらぬためには、この経済科学の原理を追求する哲学が、体系的であるということを、要件としていなければならないであろう。

(一) 本稿は、一昨々年の夏に書きためた相当分量の旧稿のうち比較的に纏つた部分の一つだけを扱んだものである。わたしは、一昨年の秋以来の病氣のため、研究活動を停止して静養中であるが、いまだに執筆さえ殆ど不能の状態にある。本誌の記念号に協力するために、右の旧稿を持ちだし、読み直してみても、この「はしがき」を附けるだけにでも、多くの時間をかけるほかなかつた。したがつて本文も、未定稿そのままであつて、何らかの添削もほどこすことも不可能であつた。この点、読者の諒恕を、ひとえに乞う次第である。——そして、この「はしがき」も、旧稿の右の部分に附した標題にたにする言いわけのようなものと受けとられるかも知れない。がしかし、マルクス主義経済哲学は、この「はしがき」に述べたような久しい以前から構想しつづけてきたものであつて、その確立のための努力が数々の未定稿として未発表のままに残されている。したがつて、この「はしがき」における論述内容は、本稿以外の未発表のもの、既に発表したものに、そして他日その体系化を実現するための今後の研究活動にも、通じて一貫しており、また一貫さすべき原理的な、わたしの主張である。いいかえれば、それは、旧稿を発表するための便宜的な主張では決してなくて、逆

に本旧稿の意図したものを一層鮮明に表現しているものと言うことができる。

ただ一つ本稿の発表に気がおくれがすることは、その内容が全く哲学的にとどまっている点で、経済学の専門誌には不適当でないかということである。経済哲学の全内容としては、経済学の批判的分析に多くの分量をもたねばならないとしても、わたしの実力は未だこの方向に極めて少量しか伸ばされていない。そこで、本稿だけでなく、すでに発表のもの未発表のものをつうじて、こうした欠陥を示しているが、なかにも本稿は、その極端にあり、純哲学的論文といつてもよいものであろう。すなわち、マルクス主義経済哲学の哲学面を創造的に解明するために必然的に問題にしなければならぬところの、ヘーゲル哲学の体系的原理としての「論理学」の第一巻「有論」における最も抽象的な「質」の部門の、さらにその前半の諸カテゴリーエンの批判的分析ということに、本稿の論述内容は、その重点をおいている。そのいみからも亦、経済哲学に原理という文字が附加されているのである。この点だけを挙げつらうならば、この「はしがき」は単なる言いわけと見られても仕方がないであろう。しかし、この原理は経済哲学を具体的に展開することを約束するものであり、さらにマルクス主義経済学をも根底から自己反省せしめずにおかないものであることに、わたしは秘かに牢固とした信念をもっている。とにかく、今のばあい、本稿が経済学に無関連でないことの理解が読者に期待できれば幸甚である。

さてマルクス主義経済哲学原理というばあいは、この要件を満しているであろうか。いうまでもなくマルクス主義経済学は、たとえば古典経済学と異つて、ヘーゲルから批判的に継承された哲学体系がそこに秘められている。古典経済学の諸学説といえども、それぞれ体系的に叙述され、それぞれの理論展開の根底には、それぞれに固有の思想的立場ないし世界観を、すなわち哲学的原理を秘めているではあろう。しかし、それらに共通の方法論は実証主義的なものであり、それらの諸体系も、実証的な経済諸智識ないし諸法則の篇別的整理であつて、この篇別の展開構成が一つの窮極原理によつて全体として一貫され、正確に言えば、この窮極原理の自己展開にお

いて段階的に秩序づけられているようなものではない。一つの窮極原理の自己運動において宇宙の一切のものを演繹的に自らの諸内容として、しかも、それらを単純なものから複雑なものへと論理的順序にしたがって、展開するという仕事は、まさにヘーゲルが彼の全哲学体系において成就したところのものであった。そして、このような体系的の典型を彼が打ちだしていることは周知の事柄である。このヘーゲル哲学の学的体系性を批判的に継承したところに、マルクスの学的体系としての、『資本論』が展開されたとみるべきであるならば、この経済科学としての『資本論』は、その経済学的叙述を、体系的なものたらしめている唯物論的な原理こそは、まさにマルクス主義経済哲学の本質的な内容たるべきものと考えねばならないであろう。ここにいう唯物論的な原理とは、マルクス主義哲学の諸内容としての唯物論の諸原理としての諸思想をいみするのではなく、これらの諸思想を統一して、しかも『資本論』という学的体系の諸契機に止揚しているところの一つの体系的原理である。すなわち、このいみでの諸原理の原理である。そして、これこそ、あたかもマルクス主義経済哲学原理とよばれるべき当のものであるとされねばならない。すなわち、このばあいにおける哲学原理ないし原理の原理という言葉は、単なる同語反復ではなくて、この反復によつて、かえつて厳密に特殊な意味を規定しているのである。

ところで種々の科学ないし一般に学問なるものが、体系的に展開されるための原理とは、さきに述べてきたとおり、それらの科学ないし哲学の全内容が、論理的に順を追って段階的に演繹されてゆくための根拠をいみするのであるが、この体系的根拠になる原理的概念の自己展開としての思惟運動において、最初に問題になることは、この思惟の自己運動が何から初まるかということであり、次に、この自己運動が如何に展開されるかということが問題になる。しかし、如何に自己運動するかということ、如何に運動し始めるかということであつ

て、この運動の始まる端緒としての概念の論理構造によつて決定されている。かくて言いかえれば、およそ哲学ないし科学の体系的原理とは、くりかえし述べるようであるが、それらの学的内容の全体を順次に規定して定立してゆく思惟の自己運動のことであるからして、この自己運動の端緒が何であるべきかという問題は、体系的原理の原理といふべき決定的な学的意味をもつものであり、しかも最初に、その概念規定が明確に規定されておかねばならないものである。このいみでヘーゲルも、この端緒の問題を、彼の哲学の全体系の出発点においてだけでなく、その各特殊部門としての諸哲学体系の出発点において、いちいち解明することを論理的に必然的なものと考えていた。たとえば、彼の全哲学体系の体系的原理である彼の「論理学」において、特に『大論理学』と呼ばれている著述においては、「学は何をもつてその初めとなすべきか」という標題の冒頭論述に多くの頁数を割いているのである。ところでマルクスも、また、彼の経済学を何から始むべきかについて、彼がブルジョア経済学諸派を批判的に研究するさいに、すでに頭を悩ましていたことは、この研究過程の諸成果を後に体系的に展開したところの諸著述からみて、十分に推察されるところであろう。すなわち『経済学批判』および『資本論』において、近代市民社会の経済学的研究の端緒が何であるべきかということが直接に論究され、これら両著において現に見られる体系的叙述もまた、商品の研究から始めらるべきことが、冒頭に強く主張されている。このことはマルクスが彼自身の経済学を古典経済学の実証主義から区別し、そして、それを止揚するためにも、ヘーゲルの哲学体系におとらず一層すぐれた学的体系として樹立することを念願とし、そして、それを成就したことを、いみする。このいみで彼の体系的経済学、とくに『資本論』は、ヘーゲル哲学の体系的原理が絶対者すなわち神の自己展開としての思弁的な「論理学」であつたにたいして、実証的な科学を媒介にした現実的な感性的人間の思

惟の体系的な演繹による労作であり、したがって、ヘーゲルの観念論哲学から區別さるべき一層現実的な哲学体系でもあることに、注意さるべきであろう。さらに、このいみでまた『資本論』も、ヘーゲル全哲学体系に匹敵する対抗的な、学的体系の他の一つの典型であることが、十分に理解されねばならないものである。とすれば、マルクスは彼の『資本論』において、その学的体系性という面において、すなわち、彼の経済学的諸範疇を、その単純なるものから複雑なるものへと順次に自己展開せしめていった彼の論理学において、それ自体そのまま、すでに彼の経済哲学を展開していたということになる。そして、このような論理学として、われわれが『資本論』を読むということが、それを体系的著述たらしめている哲学原理、すなわちマルクス主義経済哲学原理を、われわれに理解せしめることになるわけである。ところで、このマルクス主義経済哲学は、それが『資本論』の論理学であるといういみで、さきに述べかけたように、その体系的端緒を論述の最初において必然的に問題にせざるをえない。であるからしてマルクス自身も、彼の体系的著述において、商品の研究から叙述を始めたのであった。したがってまた、彼の若き時代においても既に、この学的体系の論理的端緒の問題に秘かに思を沈めていたと見られうるとしてきたわけであつた。

本稿の問題は、まさに、ここに横わっている。すなわち、「近代ブルジョア社会の経済学的研究が商品の分析から始めらるべきである」という端緒の問題についての彼の命題が、まず、その体系的原理において追究されねばならない。このためには、この命題がマルクスによつて解決されたものとして打ち出されるまでに、彼が彼の若き時代から、如何に頭を悩まし如何に思いを巡らしてきたか、ということも確かに問題にすべきものではあるであらう。しかし、このことは、如何なる論理的意味で、商品が彼の経済学の体系的端緒になりえたか、というこ

との原理的分析から逆に推定することができ、ここに推定すべきこの原理を、若き時代の彼の諸労作において文献的に考証するほかはないが、そのためにも、この後の論理的分析こそは、マルクス主義経済哲学原理の、そのまた原理として、われわれに新たな問題を投げかけているのである。しかも、この端緒的原理の論理的分析はマルクス主義経済学界の方法論の領域においても、不明確な表象のままか、あるいは、不徹底な類推のまま、未解決の状態に放置されている現状にある、という点で、この問題に、わたしは特に留意する。

(二) マルクス主義経済学の体系的端緒については、わたしとして、すでに色々な角度から取りあげて多くの論文を発表している。いわば余りにもエネルギーを、このテーマに注ぎ過ぎている感があるであらう。にもかかわらず、わたしには、なお論じ足りない点が多く、未解決の諸問題に直面しているのである。ところで、それらに共通したものは、唯物論における主体性の契機の解明、強調のために、したがって経済哲学としては『資本論』の学的体系における方法論の主体的把握のために、この学的体系の出発点において、主体的原理を究明しようとすることである。このことは、要するに、賃労働者の立場の方法論的基礎づけであり、また、それへの前提的な問題提起であった。試みに戦後の諸労作だけを取ってみても、殆ど凡てが、この意圖によって書かれたものである。——「資本論冒頭文節の体系的意味」は、問題提起の一つであり、その一面の解決が「諸商品集成の感性的直観」として書かれ、他の面としての「資本家的富の分析的思惟」が未研究のまま残されている。だがしかし、両者の統一として成立すべき冒頭文節の方法論としての「抽象的關係が如何にして感性的に直観されるか」の原理的問題への解明は、「歴史的現実と社会科学方法論」において一応は果されている。この労作は『資本論』の端緒の問題を、マルクス、エンゲルス、レーニンのそれぞれにおいて強調される契機の差異のうえに統一的性格を展開してあるが、『資本論』の体系的端緒を、その現実的な叙述に見られるとおり一まず物としての対象的な商品として扱ったものである。しかし、これの主体的把握は、賃労働者の資本制の実在性の形態として、マルクスの叙述内

容を超えて掘り下げられねばならないものである。賃労働者のこの実在性の契機が対象化され独立化されたものの単純な規定性に、物としての対象的商品が端緒として成立するのである。この対象化の論理の分析は未発表であり、未定稿にもなっていないが、構想としては戦後の再出発の最初から出来あがっている。そして、この構想の前提的諸問題を追求する方向のものとして、「賃労働者の向自有的論理構造」を「序説」とした三篇、すなわち流通過程として労働市場における賃労働者の主体性を問題にしたA「単なる商品人間としての法律的自己意識」と、労働市場を媒介にして生産過程に入ったかぎりの主体性を分析したB「単なる労働人間の生命的自己疎外」と、さらにA、B両篇の統一として具体化さるべきC「現実的賃労働者の政治的ないし歴史的自覚」の三篇が計画され、Bは「四四年手稿断片(疎外された労働)におけるマルクスの哲学思想」として既に完結発表しており、Aも「労働市場の法的人格」として法学にかかわるものにならざるため、法哲学の領域における困難な法的規範の問題の唯物論的解明に直面したまま、病氣のために中絶した形になっている。したがってCもまた、いまだ纏めかねて不十分な断片的未定稿のまま残存している状態である。

ここに、いまだ学界的に殆んど客観性をもたない私的な労働過程を、右のように詳細に述べたててきたのは、わたしの些やかな労働過程に注目してくれてる少数の読者のなかに、一つの疑問を抱かれています。思える点があるからである。それは、『資本論』の体系的端緒をマルクスの現実の叙述があるにかかわらず、すなわち、第一篇第一章「商品論」から直ぐさま第二篇第四章第三節の「労働市場」へ飛び超えて、その間の論理的発展の過程を無視しているのではないか、という疑問である。しかし、わたしの『資本論』にたいする体系的把握としては、むしろ逆に、第二篇叙述の根底に秘む賃労働者の主体性の思想から出発して、その対象の実在性についての客観的分析において、マルクスの現実を示している叙述が始めうるというにあること、前述のとおりである。しかし、この対象化の論理がいまだ労働として発表されていない以上は、右の疑問も尤もなこととして受け容れねばならない。しかしながら、第一章から第四章への、すなわち、物としての端緒的商品から賃労働者の主体性への、わたしの方法的な飛躍は、外見のものであって、この非論理的であるかのごと

き飛躍を埋める論理は、すでに用意されてあった。これが、あたかも本旧稿の内容である。

したがって、この本稿は、右の疑問ないし誤解にたいする答へになるものとして、本誌本号を記念するために、多少の無理を忍んで、未定稿のままて発表する衝動を覚えたことも事実であつた。なお本稿は、体系的端緒を対象的商品から賃労働者へ移行せしむる論理を展開するにあつて、さきに述べたとおり、ヘーゲル「論理学」の「有論」の「質」の領域の各カテゴリー——すなわち、有、無、成の始元的な弁証法から、定有をへて、向自有にいたる論理的過程——を分析的に解明するが、そのさい、ヘーゲルの論理的展開そのものが、なお客体的であつて主体性に不徹底であること、むしろ正確に言えば、神の論理としては主体的な自己発展ではあるにしても、感性的人間にとっては客体的ではないこと、が明瞭にされていることが、読者にも理解して貰えるであろう。この点で、ヘーゲル「論理学」の批判的分析になつていると、さきに言つておいたのである。なお本旧稿は、前述のわたしの労作過程としては「賃労働者の向自有的論理構造」の直前に位置づけられているものであるが、純哲学的な労作とも見るべきものとして、経済学誌に発表することを遺慮して、未定稿のまま残しておいたものであつた。しかし、本誌に敢えて発表さる氣になつた動機は、若干の経済学者からの右に述べたような間接的要請によること前述とおりであり、読者の諒承を、ここに予め乞うておく次第である。

マルクス主義哲学原理における右の端緒の問題は、その成立のための条件からみて、単にヘーゲル「論理学」の端緒の論理からの類推的演繹からのみで説明されうべきものでは決してない。というのは、他方において、古典経済学による近代資本制社会の実証科学的分析の窮極の成果が、マルクスのこの端緒的原理の概念規定のうち、すでに止揚されていて、その他方の重要な契機をなしていることを、われわれは決して忘るべきでないからである。そして事実、マルクス主義経済学が全体として、古典経済学による実証的研究の成果のうえに、ヘーゲルの思弁的弁証法が活かされて、その学的体系性を成就したのであるからして、『資本論』におけるこの学的体系

の端緒の論理構造もまた、思弁的なヘーゲルの思惟の自由な自律性を一方の契機とし、これが他方の契機としての対象依存的な感性的直観において、弁証的に統一されているがごとき全体でなければならぬ。そこには、すでに、思弁的哲学と実証的科学とが相互に独立性を特しながら依存し合うという、自己矛盾的な全体の論理構造をもつていなければならない。マルクス主義経済哲学における端緒の原理のかかる固有の性格を、最初に注意しておくことは、本稿の論述の意図が何であるか、また、その進行が如何に展開されているのかということ、に何らかの疑念を讀者に与えないために必要であると思われる。

### 一 現実的端緒における規定性としての普遍性と直接性

マルクスは『資本論』において、その体系的な叙述の進行を、単純商品の分析から始めている。これは、概念規定の最も単純なものから出発しこの端緒的な抽象性の内容の分析において、そのうちに潜む否定的契機を抽象し、これと最初の肯定的な契機との総合において、端緒的規定の抽象性を止揚し、より具体的な概念規定を自己展開せしめるというように、この思弁的操作を何処までも繰り返して、単純なものから複雑なものへと概念規定を順次に高めてゆくところの、ヘーゲルの思弁哲学固有の学問的方法を、マルクスが批判的に継承したものである。そして彼が、『経済学批判』「序説」において、この方法を学問的思惟の上向的運動と名づけ、これを理論（経済学の正しい方法としたことは、周知の事柄として今は問題でない。そして、さらに、この論理的上向運動の各段階において規定される諸概念の序列は、現実の歴史的発展における実在的な諸形態の時間的序列に照応するという、論理的なものとの歴史のものとの一致についての思想がマルクスにおいてヘーゲルから唯物論化されて

継承され、次いでエンゲルスにおいて特に強調されるにいたつてゐることも、ここで、使われている「照応する」という言葉の厳密な理解に誤りないかぎり、これまた今のばあい周知の事柄として問題にするまでもない。したがつてまた、『資本論』における体系的叙述のための端緒として研究されている単純商品のカテゴリーが、人類史上に最初に発生した単純商品に照応し、概念規定において全く同一であることのエンゲルスの主張が、マルクスにおいても十分に自覚されていたということ、言いかえれば、唯物論的学的体系の端緒には、歴史的なものと論理的なものとは相互に差別されながら同一であるという矛盾の統一の論理構造にあるべきこと、このことにも、右の周知の事柄において当然ながら演繹されるべき思想として含まれていることとして、この思想を弁証法的唯物論の創始者たちに帰することに誰しも疑問をさしはさまない水準に、現在の学界は到達しているはずである。しかしながら、『資本論』の端緒的商品における論理的なものとは歴史的なものとが差別されていることの事実認識はあつても、これらの両契機が如何にして本来的に同一性の関係にあるかという論理的分析そのものにも、すでに十分の思索が現在の学界において遂行されているかという点になると、疑問を投げかけるほかはない。ところで、この点については、わたしは既に別稿——「歴史的現実と社会科学方法論」、その他——において問題を提起し、その解明において解決の方向を結論づけておいたのであるが、この解明が概括的な一般的構造にとどまつてゐるので、その一層の原理的な、したがつて哲学的な掘り下げが、なお要請されているとせねばならぬ。本稿は、この要請に応えたものであるが、まず最初に、端緒的商品についての右の概括的な一般的な論理構造を、ここに改めて想起しつゝ、思弁的分析を進めることにしたい。

さて、端緒の商品の論理構造を全体的に把握するばあいには、それが如何なる姿で実存しているか、というこ

とを最初に要約的に述べるならば、それは、資本制社会の細胞形態としての、われわれの眼前にあり手に触られる等、要するに、われわれの感性的直観の対象として現に実在するところの、しかも種々の異なる形態において現に実在するところの、個々の現実的な資本制的商品である、ということである。『資本論』の学的体系の端緒を、かかる論理的には既に複雑化された資本制的商品とすることは、現に『資本論』の叙述が、資本制社会以前に歴史的に実在していた単純商品に照応するところの、論理的規定の最も抽象的な、単純商品から初まっているという事実に基づくように見える。それにしても、『資本論』の叙述がその学問的思惟の向上的運動を、そこから初めた単純商品なるものは、現実の眼前にある資本制的諸商品から、その種々の諸形態から、共通の規定を抽象して、同時に資本制的に特殊な諸規定を捨象したかぎりの、要するに、資本制商品の複雑な規定が分析的に単純化されたかぎりの、論理的に単純な規定であるという単純商品である。したがって、この上向的叙述の端緒としての単純商品は、すでに方法的に、現実的な資本制商品からの下向的な科学的分析を、前提してのみ定立されえたものと理解せねばならない。すなわち、ヘーゲルの体系的な自己運動としての総合的演繹の方法の端緒は、マルクスにおいては、実証科学的な分析的帰納の途を媒介にしたもの、そのかぎりで、むしろ、この分析的下向運動が始まる現実的端緒としての資本制商品のもつ論理的な全体構造の一契機たるにすぎないと、見ることができらるものである。したがって、さらに、論理的端緒としての単純商品と歴史的端緒としての単純商品とが、相互に差別さるべき関係になって、しかも同時に同一性の関係——一つは觀念的な思惟産物であり他の方は歴史的事実であるという差別性——にしなければならぬとする弁証法の論理的要請は、二つの単純商品が単に単純な思惟規定を共通にするといういみでの同一性——これがマルクス自身によって使用されているところの「照応する」

という言葉の意味であるが、このような共通性としての同一性——だけでは、満足されうるものではないはずである。言いかえれば、二つの単純商品が同一であるべきだとする右の弁証法が、観念的なものと実在的なものとが同一でなければならぬことの要請である以上は、実在的契機を現実にもっている対象的な商品においてしか、この論理的要請は満足されないはずである。そして、かかる対象的な商品は現実の資本制的商品であり、ここにおいてのみ、科学的思惟抽象の所産としての観念的な契機と、歴史的に過去の現実的所産としての実在的な契機とは、一個の資本制商品として現実に同一である。すなわち、このようにして現実の資本制商品の論理構造の全体は、これらの両契機——観念的なものと実在的なものと、したがって亦、論理的なものと同歴史的なもの——の統一として実存していることが明かであろう。さらに、このことは、したがって論理的端緒と歴史的端緒との同一性ないし統一として、現実的端緒が、われわれの科学的分析の対象として、現在われわれの眼前に実存している、ということをも物語っているとせねばならないであろう。

ところで、このような論理構造にある現実的端緒を、われわれに明示し、その論理構造の分析の課題を、われわれに暗示した言葉として、われわれはレーニンの次の引用句をもっている。

——「資本主義の本質的特徴は、マルクスの学説にもとずけば、第一に、生産の一般の形態としての商品生産である。生産物は種々様々の社会的生産組織において商品の形態をとる。だが、資本主義的な生産においてのみ、生産物の商品形態は、例外的でなく、孤立的でなく、偶然的でなく、一般的なものとなる。

資本主義の第二の特徴は、単に労働の生産物のみならず、労働そのものが、すなわち人間の労働力が、商品の形態をとることである。労働力の商品形態の発展の程度は、資本主義の発展の程度を特徴づける。」——

右のレーニンの言葉の意味が、近代資本主義社会の経済学的把握における端緒的分析に前提されている現実の資本制的商品の指摘である、というように誰にも自然に理解しようとするところであるとすれば、そして同時に亦レーニンが『資本論』の上向的叙述における出発点が、論理的端緒であると同時に歴史的端緒でもあるという方法論的原理を、すでに自明のこととしていることを考えあわすならば、われわれとしては、レーニンが右の引用において、これらの三つの端緒の相互関連の問題を、方法論的に自覚していたものと、考えねばならないであろう。ところで、この相互関連の問題は、レーニンによつて、かかるいみで解決さるべき課題として、われわれに始めて暗示されるにいたつたとする今の主張は、もちろん誤りであつて、それ以前に既に、マルクスが『経済学批判』「序説」において、「経済学の方法」として解決していたところのものであつた。すなわち、そこにおいてマルクスは、ヘーゲル的な思惟運動の觀念性を止揚することによつて、唯物論的な学的体系を成立せしめる上向的な論理を展開し、そして、歴史的な発展の意味をも生かしながら、実際に『資本論』に見られる体系的叙述を成し遂げたのであり、また他方、そこにおいて同時に、現実の具体的な資本制社会全体の一つの混沌たる表象から下向する科学的分析と、右の上向的綜合との統一における円環的な思惟運動を指示しているのである。しかも、この下向的な科学的分析は、マルクスにおいて現実に、彼以前の近代における経済学諸派の批判的研究として遂行され、その成果は『剰余価値学説史』となつて結実しているのである。このいみでは、マルクス主義経済哲学の全体系を、単に『資本論』の上向的叙述の原理だけにすることは、一面的であつて、哲学的であることを直接的に示しているところの、この上向的叙述の出発点にまで下向してゆく他の面の下向的な分析としての科学方法論が、近代の経済学諸派から批判的に摂取され、同時に、この批判的研究に於いて主体的に活用されたかかる

科学的方法論の現実的成果であるはずの『剰余価値学説史』もまた、マルクス主義経済哲学の全体系を構成する今一つの契機として、把握されねばならないのである。であるとすれば、かかる把握を可能ならしめる現実的端緒をば、レーニンが明示しているということは、彼もまたマルクスの経済哲学の全体系を、かかるものとして論理的に前提しておればこそ、ということも何らの論証を要しないところであらう。

(二) 資本論の学的体系が、かかる下向的分析と上向的演繹との総合としての閉環運動を構成し、しかも歴史的現実の實在的發展を段階ごとに把握しうるものとして、ヘーゲル哲学の体系のごとく完結された閉環運動ではありえず、未完結なそれであることについては、他のわたしの諸著作——「諸商品の感性的直観」、および「資本論における哲学と科学との一致」(『資本論の学問的構造』所収等を参照されし)。

以上のような意味をもつものとして、右に引用したレーニンの言葉を、ここに問題にして見ることにしよう。そうすると、最初に容易に分析されうることは、第一に、現実的端緒の規定として、商品生産の普遍化が近代資本主義社会の特徴をなしていること、言いかえれば、「商品生産が近代資本主義において最も普遍的なるがゆえに、マルクス主義経済学は、その研究を商品の分析から始める」と主張していること、このことであらう。そこで、われわれの本稿における今後の思弁的な分析も、このレーニンの命題を手がかりとして、これから出発せしめることが、論述上から便利である。そうしたばあい、われわれは直ちに、このレーニンの命題にたいして、「普遍性という規定が、果してそのまま、学的体系の端緒になりうるであらうか」という疑問を投げかけることができるであらう。ところで、この投げかけた疑問に解答を与えることこそは、まさに現実的端緒そのものの全体的な論理構造の分析的解明になるわけであるが、本稿においては、経済哲学の原理の原理を展開する意図にあるものとし

て、この疑問の解決をヘーゲル「論理学」における端緒の規定に関連せしめて、論述を進行せしめることにしたい。この希望は、ヘーゲルの『大論理学』の「学は何をもってその端緒とすべきか」というさきに一寸指摘しておいたところの、その冒頭論述における次の言葉によつて、きわめて示唆的に、この疑問にたいする第一歩の解明が与えられていることを、われわれは知るのである。

——「経験的な個々の学問は、その対象を前提し、各人がこの対象について同一の表象をもち、また、その中に殆ど同一の規定を発見しうることを、希望的に想定し、しかも、この規定を対象に關する分析、比較および他の推理によつて処々方々から拾ひ集めて提出する。同様に、絶対的端緒となりうるところのものもある普通に既知の存在であることを必要とする。そして、もし、これが具体的存在で、したがつて、その中に多様の規定を蔵するものであるならば、そのばあい、この存在がその中でもつところの關係が、既知のものとして前提している。したがつて、この關係は、或る直接的な存在として与えられている。しかしながら、關係、というものは、直接的な存在ではない。なぜかというに、關係は、區別されたものとの間の關係として始めて關係たりうるもので、したがつて、そのうちに媒介を包含しているからである。さらにまた具体的存在においては、分析および種々の規定作用に固有の偶然性および恣意が現れる。そして如何なる規定を採用するかは、各人がそれぞれ、その直接的偶然的表象の中に発見するところのものに依存する。ゆえに、或る具体的存在すなわち綜合的統一の中に含まれる關係は、単にそれが発見された事実であるという点で必然的になるのではなく、むしろ統一の中へ復歸するところの契機の固有の運動を通ずることによつて生ぜられるかぎり、必然的なのである。そして、その運動は、分析的方法、すなわち事柄そのものに外的で、ただ単に主観の中に存するような行為とは正

反対のものである。」（八九頁）<sup>(二)</sup>——

ヘーゲルは右の引用句において、具体的対象を前提する経験的な特殊諸科学には、真実の意味では、学的体系の端緒はありえないことを主張している。経験的科学は自然科学にせよ社会科学にせよ、一般的に、若干の感性的諸対象を、その諸現象において比較し、分析し、そこにおける共通の本質的関係を抽象して、これを法則として定立し、さらに諸法則の統一原理にまで何処までも、かかる分析的な思惟運動を本質の領域において下向せしめるものである。ところで、この下向的な思惟運動の端緒は、われわれ認識主観が予め所有している共通の表象を対象の中に希望的に想定するか、あるいは絶対的原理とされているものを仮設として前提してこれを実証的に検証するかであって、対象についての感性的直観内容を分析するまえに、すでに諸対象間の普遍的関係についての既知の表象から出発している。さらに、諸規定の総合的統一であるような諸対象間の分析的思惟においては、そこに発見される諸関係を本質的と決定するためには、最初は認識主観各自の恣意、偶然によるほかに方法はな<sup>い</sup>。このようなヘーゲルの主張が事実であるかぎりでは、マルクス主義経済学といえども特殊の経験科学の一面をもつかぎりでは、そのまま承認するほかはないであろう。したがって『資本論』を単に経済科学として見る人々には、商品の端緒の意味を方法論的に論ずることが、無意味なものに思われるにいたることさえ生ずるのである。しかしながら『資本論』は、他の面に、その学的体系性のゆえに経済哲学の性格をもっている。そのかぎりではマルクスはヘーゲルとともに、学問の端緒の方法論的意味を重要視したのであった。しかも『資本論』が経済哲学であると同時に経済科学であるという両面性のゆえに、その端緒的商品は論理的に単純な規定の商品としては一面的であって、その歴史的に実在する単純な商品でもあるという二重性の現実の統一を——この二重性はヘーゲ

ル哲学から批判的に継承されてきたのであるが、かかる思弁哲学と経験科学との両面性の統一としての固有の特性を發揮するためのこの二重性の現実化を——実現している現在の感性的な対象的実在としての資本制的商品に、マルクス主義経済学の哲学的体系の端緒の全論理構造をわれわれはここに以上の論述において期待して来たのであった。そして、この現実的端緒の論理構造を解明するための手掛りに、——「資本制的商品生産、したがって、それらの相互の交換関係が、資本主義社会において最も普遍的であるから、マルクス主義経済学は商品の分析から始める」——というレーニンの命題が、とりあげられたのである。

ところで、このように解釈されたレーニンの命題は、普遍性を、普遍的関係を学問的思惟の端緒として規定しているかぎりのものとしては、右のヘーゲルの批判に堪えないことを、われわれはここに承認するほかはないわけである。それでは、ヘーゲルは学的体系の端緒を如何に規定したのであるか。——右の引用句に続いて、——「以上の事実の中には、端緒は具体的存在ではなく、また、その中に或る関係を含むがごとき存在であってはならぬという意味が潜んでいる。何となれば、このような存在は、すでにその内部において、最初のものから他者への媒介、あるいは推移を仮定するからであって、具体的存在——今では、端緒として單純なるものとなつてはいるが——は、むしろ、この推移の結果に他ならぬものであらうからである。しかしながら、始まりは最初のもので且つ同時に他者であるというような存在であつてはならぬ。それ自身最初で且つ同時に他者であるような存在においては、すでに前進が行われている。したがって端緒を構成するところのものは、否、端緒かれ自身は、單純な未だ充實されぬ直接性の中にあるところの、分析不可能な存在、すなわち、有といふ全くの空虚として考えなければならぬ」。(八九頁)<sup>(1)</sup>

と迷べているのであるが、このような主張から、ヘーゲルは純粹思惟の学としての「論理学」の叙述を、かかる純粹、有から始めるのにたいして、マルクスが『資本論』で叙述を始めているのは、まさにヘーゲルによつて指摘されている具体的な存在としての商品からである。しかしながら、さきに述べたとおり、『資本論』が単に経済学という特殊科学であるだけでなく、ヘーゲルの全哲学体系の論理がそこに止揚されて存在するものと見るべきかぎりでは、それは同時に、哲学であり論理学であることをいみしなければならぬ。そこで、商品の端緒としての論理構造の解明のために、ヘーゲルの哲学的端緒の論理を承認した上で、これを批判的に検討しながら、論述を進めようとするにしても、それは、論理的に不適當な手続きではないとせねばならぬであらう。

(二) ヘーゲル『大論理学』（邦訳岩波版）八九頁。——以下同様に、この『大論理学』からの引用頁は、本文中に漢字数字で示す。

さて、マルクス経済学の研究の端緒の分析は、今までのところでは、その現実的端緒の論理構造の解明に焦点が合され、普遍性ということが一見その規定であるかに見えて、然らざる所以が、ヘーゲルの前掲の言葉において指摘されてきたのである。そこで一まず、具体的存在を端緒にせねばならない特殊科学において、普遍性という規定のほかに何をもつて端緒の規定とすべきであるかを知ることが、次に必要になってくるが、このことを知るために、一般的な学としての哲学のばあいには、その本来的な端緒の論理構造が、如何なるものであるかを試みに吟味してみることが、更にその前に必要である。そして、もし端緒の本来の規定が他に発見されるならば、これを試みに、経済学という特殊科学としての『資本論』の現実的端緒に適用してみる。そして、この適用の妥当なることが実証されるならば、それが、マルクス自身の遂行したヘーゲル哲学止揚の足跡をたどりえたということ

にもなるはずである。このような検証的な手続きとして、以下、本稿の論述は進められるだろう。

さて、さきに、普遍性が一般に学問の端緒となりうるとしても、それは客観的思惟の論証を媒介にせねばならない、ということがヘーゲルによって指摘されていることを、われわれは理解してきた。ところで、ヘーゲルの端緒は、この客観的な思惟の端緒が何であるかということから、問題を始めているのである。

——「思惟し始めるとき、われわれは、全く無規定な思想しかもっていない。というのは、規定には、すでに一つのものと他のものが必要であるが、始めにおいては、われわれは、まだ他のものをもっていないからである。端緒においてわれわれがもっている無規定なものは、直接的なものであって、それは、媒介をへた無規定あらゆる規定の揚棄ではなく、直接的な無規定、あらゆる規定に先だつ無規定、もつとも最初のものとしての無規定である。これを、われわれは有と呼ぶ。——

と『小論理学』——第一部「有論」A「質」a「有」の最初の節の補遺——でも述べている。そして、この節の本文は——「純粋な有が端緒をなす。なぜなら、それは、純粋な思想であるとともに、無規定で単純な直接態であるからであり、第一の端緒というものは、媒介されたものでも、それ以上の規定されたものでもありえないからである、」——となっている。すなわち、媒介されたものから、われわれが仮りに始めるとしても、この媒介されたものは他のものから媒介されたものとして、すでに対象の側において運動が始まっており、われわれが真実の出発点に立とうとするかぎり、この対象の運動をさかのぼって他のものから始めねばならない。この他のものも、また媒介されたものとして何らかの規定をもつ具体的なものとするならば、この規定を与えた前のものに、さかのぼって始めるほかなく、かくて、無規定、無内容な、純粋に抽象的なものに逆行して始めて、われわれは、

真実の出発点に到達したことになる。これがヘーゲルにおいて、純粹に有る *reine Sein* ということで、それは無内容なものとして、そのまま純粹に無い *reine Nichts* ということである、とされる。そしてこの有と無との直接的同一性ということが、ヘーゲル「論理学」の端緒がもつその論理構造の最初の動的契機をなすのであるが、しかし、今われわれとしては、具体的な商品が如何なる意味で端緒であるかの問題を念頭に浮べているのであるから、われわれ注意のすべきことは、ヘーゲルのかゝる純粹有が果して真実の端緒であるか否かということではなく、この純粹有という端緒を真実の端緒として発見するためにヘーゲル自身の取ったところの、その手続き——すなわち、具体的なものから遡源するという論理的操作——の吟味でなければならぬ。すなわち、それは、媒介されたものから媒介するものへ、という無限遡及によって規定的内容を消去してしまうという方法であった。そして真実の出発点は、無内容となつたかぎりでは、もはや媒介されていないものとなつていたのである。このヘーゲルの論理的操作を形式的にのみ見るならば、端緒の発見の方法は、被媒介から媒介へと限りなく遡って、ついに媒介を絶つること、すなわち無媒介になることである。無媒介とは、すなわち直接性である。かくて、われわれには、直接性ということが、如何なるばあいにおいても、端緒を決定するための手続き上、不可欠な、形式的規定であると、ヘーゲルにおいて考えられていたことが判る。そこで、直接性が端緒のかかる形式的規定であるとするかぎりでは、この形式的規定を発見するためにヘーゲルのとつた論理的な手続きを、特殊な学問すなわち経験科学としての経済学に——たとえ外面的であるにしても——適用して見ることも、不可能でない。しかも、この可能性は、経済学の学的体系的な端緒が何であるべきかということを発見せしめることを或いは保証しているかも知れない。このような見透しをもつて、マルクス主義経済学の端緒とされている具体的な対象的商品に、

右の端緒として一般的規定——今のばあい、それが形式的規定としての直接性とどまって、ヘーゲルの純粹有をいみするものではないにしても——を適用するとすれば、如何なることになるであろうか。

## 二 純粹直接性の規定の端緒の商品への外的適用

商品は具体的な対象的實在であり感性的な物である。すなわち、すでに複雑な諸規定の綜合であり、その被媒介性を内容的に無媒介性にまで遡源するということは、商品の商品たる規定性の無視であるから、商品が商品としての規定性において端緒であるとするマルクスの立場を否定することになる。そこで今、端緒の形式的規定性としての直接性を商品に適用してみるとしても、商品の商品としての規定性のままで直接的であるということになり、このことは論理的に許るされない矛盾であることは明らかであるが、しかし、ヘーゲルの端緒についての形式的規定を、試みにマルクスの端緒としての商品に外から機械的に適用してみると目下の論述上の手続きの段階においては、まず第一に、次のごとき命題、——すなわち「具体的な商品といえども、自らの外にある或る他のもの、にとつては、直接的でありうる、」——としては不可能ではないであろう。もちろん、商品が商品として直接的であるということの内容の意味としては、別に、商品自体ということになりうるが、しかし、いま適用せんとする端緒の規定性は、諸規定を止揚した直接態、媒介を含んだ直接性ではなく、純粹の絶対的直接性である。したがって、この純粹の直接性を複雑な規定体たる物としての商品に適用すること自体が、非論理的であるが、であればこそ機械的適用として敢えて試みて見るだけのことである。そこで——「商品が或る他のものにおいて直接的であるばあい、この商品は端緒になりうる、」——という命題を最初に一まず仮定的に承認して、われ

われは、この命題を吟味してゆくつもりであるが、このばあい、この命題における他のものとは何であるか、また端緒とは如何なる運動の出発点であるか、ということが決められねばならない。ところで、マルクスが商品と端緒としたのは、いうまでもなく、近代ブルジョア社会の経済学的研究の出発点の意味であつた。すなわち、われわれが商品の分析から始めるかぎり近代ブルジョア社会は全体として具体的に認識できるというのである。したがつて、商品が端緒をなすべきだということは、この認識的思惟の始まりをいみしているはずであるが、この点、ヘーゲル「論理学」の端緒の意味が、学問的思惟の始まりであつたことと一致する。だがヘーゲルの学問的思惟が純粹思惟であつたにたいして、マルクスの学問的思惟は、対象を前提したわれわれ人間の自然的意識における思惟であり、すなわち日常的ないし科学的な思惟である。しかも、この日常的ないし科学的思惟に前提される対象が感性的な物としての商品であるから、この商品が端緒であるために直接的でなければならぬ。他のものとは、われわれの日常的ないし科学的思惟であり、自然的意識をもつわれわれ自体であり、現実の感性的なわれわれ人間であるほかない。とすれば、右の第一の仮定的な命題は——「商品が現実的人間において直接的であるばあい、この商品は、この現実的人間の学問的思惟の端緒になりうる」という命題に具体化される。

ところで、この第二の仮定的命題は、外見的には、また、第一命題からの演繹における具体化の操作からみても当然のことであるが、感性的商品が現実的人間の外に存在しておつて、両者は、対象と意識との対立関係として直接的である、というように述べられているかのごとくである。言いかえれば、物としての商品とわれわれ人間とは、相互に差別されて存在しながら認識的には最も間近かな関係にある、あるいは要するに、われわれの日常の生活において商品は最も眼に触れやすい、それだけ普遍的な事物である、というだけの意味しか伝えていな

いかのようである。しかしながら、第一、第二の命題を通じて、直接的という端緒の形式的規定は、まえにへーゲルによつて注意されてきたとおり、媒介を止揚した直接性でなくして、純粹の直接性であった。したがつて、感性的な物としての商品と現実的われわれ人間とは、それぞれ媒介的諸規定の綜合体であつても、それらが結ぶ関係は、媒介を許さない純粹の直接性、すなわち、関係でない関係でなければならぬことを要求している端緒的規定である。関係でない関係とは、関係という媒介性の成立以前の、或るものと他のものとの區別以前の狀態として、未だ一つであること、自己同一ということ、すなわち同一性であろう。このように同一性は、論理的展開の順序においては區別以前の無関係をいみすべきであるが、區別という関係を發生せしめ成立せしめる無関係としては、関係を潜在せしめた無関係として、すなわち、一切の關係の初まりとしては、一つの關係である。

さて第二の仮定的命題にかえつて、このことを考えてみるとしよう。そうすると、物としての商品とわれわれ人間とが相互に外的な對立關係にあつて相接しているというように、直接性を外見的に理解することは、直接的關係の純粹性を無視したことが明らかにされたわけである。では、この純粹性の規定が命ずるままに、物としての商品とわれわれ人間とが同一性の關係にある、否、両者は關係以前の自己同一である、とするにしても、一体このことは何をいみするであろうか。物とわれわれの意識との對立以前の同一的狀態ならば、それは感性的な直觀の狀態であることに問題がないが、この直觀から出發して分析的思惟を始めるところの、われわれ現実の感性的人間と外的な對象的な物としての商品との自己同一ということが、純粹な直接性なる規定によつて要請されているのである。しかし注意すべきことであるが、純粹な直接性という端緒的規定の要請しているものは、外的な物とわれわれ人間との自己同一でなくて、物としての商品と現実的人間との同一性である。しかし、これだけの要請

ならば、われわれは容易に、經驗的事実によつてこの要請に応えることができる。すなわち、現実的人間が直接的に物としての商品であるという事態の存在している事実が、言いかえれば、近代資本主義社会における賃労働者の姿そのものが、あたかも、まさにこれでないか。かくして、第二の命題は再転して次のごとくならねばならない。——「現実的人間が商品として存在するばあい、この商品は学問的思惟の端緒でなければならぬ」——と。

この第三の命題は重要にして重大である。上述来ヘーゲルの「論理学」の端緒の規定をその内容にかかわらずその形式のみをとつて、マルクス経済学に外的に取て機械的適用を試みるという手続きをほどこしてきたのも、この第三の命題を念頭においていたからこそであつた。——その重大であるという意味は、マルクスの『資本論』の叙述における端緒としての商品が、単なる外的対象としての物であるに反して、この第三の仮定的命題は、人間の自体的商品としての存在性が、マルクス主義経済学の現実的端緒であるとすべく要請しているからである。しかしながら、この差異は外見的なものにすぎない。すなわち、後者においては、現実的端緒が問題にされているにたいして、前者は、その一契機にとどまる論理的端緒であり、それが『資本論』の体系的叙述において現れたものにもすぎないからである。——次に、重要であるという意味は、端緒の問題にたいして両者の本来的一致にかかわらず、後者の立場から前者の事実を見ることによつて、『資本論』全体の方法論についての従来の諸解説と異つた真実の理解が、そこに約束されていることになるからである。なぜならば、『資本論』に現実に見られる体系的叙述のままに、端緒的商品を対象的な物として把握するばあいは、その端緒は科学的認識の出発点であるにとどまり、その体系的上向の出発点としての論理的意味が見失われる危険性にある。これに反して、端緒的商品が賃労働者であるべきだとする後者の第三命題に立つばあいは、その端緒は賃労働者の主体的な哲学的自己認識の

出発点となるからである。マルクス主義経済学が、賃労働者の学問的な総合思惟に成立する主体的世界観において、その対象化の働きとしての客体的社会環境の科学的な分析思惟に、成立すると考えているものである以上、現実的人間の本来の思惟の出発点は、第三命題としてのみ自覚的に提起されたとすべきであろう。そして、このことこそが、現実的端緒についてのレーニンの命題において掘り下げらるべきものであるとするならば、このような現実的端緒の主体的把握こそが、その全論理構造——すなわち、その實在的契機と觀念的契機との、したがって、その歴史的契機と論理的契機との統一的全体としての構造——を、われわれに理解せしめることにもなるはずである。と同時に、したがって、『資本論』の経済哲学的な意味を、ヘーゲルの哲学体系の止揚によるかぎりのマルクス固有の学的体系性として理解せしめるはずのものも、また、この現実的端緒の主体的把握でなければならぬと考えることができる。これらの重要な問題の解明は後述にゆずることにして、第三の命題は、さらに、その分析が進められねばならない。

そこで、このような観点から、さきに引用したレーニンの資本主義の特徴づけに関する言葉を読みかえすとき、レーニン自身も、このような思想をそこに前提していたと考えられないであろうか。彼がそこで挙げている資本主義の第一特徴としての商品生産の普遍性ということは、実は、その第二特徴とされている労働の商品化の事実によつて徹底化する事柄でなければならなかつた。したがって、現実的端緒の規定についてのレーニンの命題は、商品生産の普遍性の規定の指示であるよりも、第二特徴を基本的として、そこにおける賃労働者の商品的、實在性を端緒の規定として把握すべきことを暗示していたと、われわれは理解すべきであろう。レーニンとしても、当然ながら、第三の仮定命題のとおり、——賃労働者は、現実的人間でありながら、その現実の存在性において

は、そのまま商品であり、ただそのかぎりにおいてのみ、学問的思惟の出発点そのものである——と考えていたはずである。すなわち、マルクスの学問的思惟の端緒は、ヘーゲルの純粹思惟ではなくしての、現実的人間の商品としての現実存在 *Dasein*、したがって、賃労働者の実存 *Existenz* であるということである。この *Dasein* は語源としては、或る「場所に在るところの有」とか「そこに有る」とかの意味をもつが（一五五頁）、存在論的解釈学ないし実存哲学の領域では、ただの存在 *Sein* にたいして人間の存在、したがって人間の実存を特にいみせしめられ、わが国においては、「現存在」と訳されている。しかし、ここにおける分析的叙述は、ヘーゲルの「論理学」に添うているかぎりのものとして、かかる存在論的分析は省りみないことにし、訳語もヘーゲル翻譯書に慣行的な「定有」を採用してゆくことにする。

ヘーゲルのこの定有は、『小論理学』においては、次のごとく規定されている。——「成 *Werden* のうちにある無 *Nichts* と同一のものとしての有 *Sein*、および有と同一のものとしての無は、消滅するものにすぎない。成は、自己のうちにおける矛盾によって崩れ、有と無とが止揚されているところの統一となる。かくして、その成果は定有である。」ここでは、(Ssg. S. 277) 定有が成立するまでの論理過程が叙述されているわけであるが、このヘーゲルの端緒の弁証法については、後に触れねばならないので、今は、この定有のカテゴリーが現にあるがままの状態の論理構造を、観察することに限っておくとすれば、『大論理学』の方では、第二章「定有」の冒頭に、——「定有は規定された有である。その規定性は、有るといふ規定性すなわち質である」（一五三頁）——と叙べられている。純粹有が一般に、ただ有るといふことであるにたいして、規定された内容をもち、したがって、質的に個々別々に有ることである。『小論理学』では——「定有とは、直接的な、あるいは有としての、規定性としてあるよ

うな規定性をもつ有であつて、この規定性が質である。このような自分の規定性のうちで、自己のうちに反省したものととしての定有が、定有するもの *Daseiendes*、ないし或るもの *Etwas* である (§. 90) とされており、さらに『大論理学』では、——「定有は、(a) 定有そのものとしては、まず、その規定性たる (b) 質と区別される。しかし、この質は定有の二つの規定において、すなわち実在性および否定性として、とられなければならない。だが定有は、この二つの規定性のうちにおいて同じように自己に反省している。そしてかく反省したものととして定立されると、(c) 或るもの、すなわち定有するものである、」——とある。

(一) ヘーゲル『小論理学』(邦訳、文庫版) 第八、九節二七七頁。——以下、この『小論理学』かくの引用は、本文中に p. 389, p. 277 とどうふうに通一して、『大論理学』からの引用と区別する。

以上によつて、定有一般には、初めに質としての規定があり、この一般的規定は次に特殊化されて、実在性と否定性との二つの規定として現れていることが判る。この特殊化のためのヘーゲルの思弁的論理を分析的に吟味することも、ここに省略するとして、この二つの規定の關係を見さだめるために『小論理学』によると、次のごとく述べられている。——「質は、有るといふ規定性としては、実在性である。この実在性は、質のうちに含まれているが、質から区別されている否定性に対峙する。否定性は、もはや抽象的な無ではなく、一つの定有および或るものとして、或るものの形式にすぎない。すなわち、それは他有 *Anderssein* としてある。」——と。かく、定有が定有として示している主要な構造は、その二つの対立的契機——実在性と否定性と——の統一であるということである。

さて、以上のようなヘーゲルによる定有の概念規定を、賃労働者としての定有——今ここでは、『経済学批判』

の体系的叙述におけるがごとく、物としての対象的商品が「定有」として把握されているのではなく、賃労働者もまた一つの規定された有として、定有というカテゴリーで把握されているのであるが——に適用すれば、いかなる概念規定をわれわれは新たに獲得することになるであろうか。——まず、定有そのものの一般的規定として質は、賃労働者としての規定性である。つぎに、賃労働者としての質の、有としての面がその实在性であるが、これは、いままでもなく、賃労働者の实在性としての商品性であろう。ところで、賃労働者という一般的規定に含まれていて、しかも、これから区別されながら、商品という实在性に対峙する否定性とは、何であろうか。この否定性は、もはや抽象的な無でないけれども、賃労働者としての質の、無としての面が自己反省された或るもの *Etwas* であり、商品としての实在の他有、すなわち、商品で無いと否定するところの定有するもの *Daseinendes* である。賃労働者が自らの質的实在性にたいして、この規定そのものを自らのうちにおいて区別する、という賃労働者自身の否定性とは、賃労働者の人間性でないであろうか。とすれば、賃労働者としての定有は、商品としての实在性と、それになりたいする否定としての人間性との区別における同一性である。しかるに、賃労働者という質的定有一般において、その商品としての实在性も、人間としての否定性も、ともに均しく自己に反省して、定有するものであり、相互に或るものと他のものとの外的関係におかれては、ただでなく、实在性としての商品は感性的な物であり、否定性としての人間は精神的な生物であって、明かに相互に差別されている。このように外的に差別的関係を示しながら一人の賃労働者として自己同一であるとすれば、両者の関係は、もはや、区別における同一性でなく、差別における同一性として、対立としての関係に入っているのである。しかも、この対立関係の両項が、一個人としての同一の賃労働者のうちにおいて、この賃労働者の人間としての定有を否定するか肯定

するかの相互に排他的であることをいみすべきであるかぎりでは、この対立は、矛盾に尖鋭化する可能性を常に示しているとせねばならない。かくては、賃労働者としての定有するものは、矛盾的な自己同一と規定さるべき論理構造にあるといわねばならないであろう。

ところで第三の仮定的命題によれば、「学問的思惟の端緒が賃労働者自体である」というのであるが、このことの可能性は、賃労働者の定有が、以上のごとき論理構造にあるからだ、ここに確認されなければならない。これを言いかえれば、次のごとき命題となる。——「賃労働者に内在的な自己矛盾が、賃労働者が学問的思惟を始めるための論理的根拠である。」——これは第三の仮定的命題の三転した第四の仮定的命題とすべきであろう。すなわち、賃労働者が人間としての自らの規定性を自覚するときに、かれの体験する自らの商品的実在性との自己矛盾をば、かれ自ら主体的に解決せんとする実践的思惟が、そのまま人間の学問の初まりになる、というわけである。すなわち、賃労働者に内在的な矛盾の自己解決的な運動が、そのまま現実的なわれわれ人間の学問的思惟の自己運動になっているのである。マルクスの学問的思惟は、まさに、かくのごときものでなかつたであろうか。そうだとすれば、マルクスの学問的思惟が、ヘーゲルのそれのごとき絶対精神の主体的自己運動としての形態をとることにたいする差異が、その根拠が、ここにはじめて判然とすることになる。そのみならず、他方、右の内在的矛盾そのものの主体的な自己解決であるかぎりでは、人間的にして実践的な形態をとるマルクスの学問的な、したがって彼の哲学的な思惟も、ヘーゲルのそれと同じく主体的に自己運動するものであるということ、このことも、ここに同時に判然とする。『資本論』は、このような賃労働者の、あるいは賃労働者の立場にたった現実的人間の、その人間的思惟の主体的自己運動が徹底され完遂されたかぎりの所産でなければならない。

このように見てくれば、最初にかかげた第一の仮定的命題——「商品が他のものにおいて純粹に直接的であれば、この商品は学問の端緒になりうる」——ということが、三回の変態を経て第四次の仮定的命題の形態をとるかぎりにおいては、マルクス自身の思想に事実上たしかに一致することを、今しがた見たのであるから、この第四次の命題は、もはや仮定ではなく、検証された仮定として、したがって真理として、受け容れられてよさそうである。もし、しっかりとすれば、ヘーゲルの端緒に関する形式的規定を、試みにマルクスへ機械的に外的に適用をしてきた今までの手続き上の論理的操作も、けつして無駄ではなかったことが、ここで、われわれは始めて承認しうるにいたったというわけであろう。だが、しかしながら、よく注意すれば、第四の仮定的命題についてのこの検証は、上叙のことだけでは、未だ推定にとどまるだけであつて、検証が事実として成就されているわけではない。そこで、ここに残されているところの、この仕事に入つて、その論理的操作を、なお続けてゆかねばならないのである。

まず第一に、第四の仮定的命題は、そのところで述べられたうように、賃労働者が、「人間としての自らの規定性を自覚する」ときに体験する内在的自己矛盾が、学問的思惟の端緒であるのであつたが、この「人間としての自らの規定性を自覚する」ということは、ヘーゲル「論理学」においては、向自有 *Fürsichsein* のカテゴリーによつてのみ表現さるべき思想であつて、この向自有が定有の一層發展した高次の論理的段階にあるかぎりでは、定有のカテゴリーによつては理解しうべきでない内容を含んでいる。定有が規定された有として、現実的な事物の世界における、したがつて常識ないし科学における、端緒でありうるという想定で、今までの論述を進めてきたのであつたにしても、この定有に媒介されて成立する向自有によつて、学問の端緒を論ずることは、論

述の立場自体を破壊する背理ということになるほかないであろう。それにしても、この問題を解決するために、とりあえず、ヘーゲルによって向自有なるカテゴリーの論理構造を説明しておくことを順序とする。そこで、われわれは、ヘーゲルの「論理学」にそうて、定有から向自有まで、その概念規定の自己展開を辿っておくことにしよう。

### 三 賃労働者の自覚的および無自覚的な論理構造

ヘーゲル「論理学」における、この定有から向自有までの範疇的な自己展開の過程については、その簡単な叙述を、われわれは『大論理学』第二章の冒頭において見いだすことができる。

——「定有は規定された有である。その規定性は、有という規定性すなわち質である。或るものは、その質を通じて他のものに対立し、それがために変化的有限で、ただ単に他のものと対立比較されて否定的に規定されているのではなく、むしろ、それ自身において全く否定的に規定されている。ゆえに、この或るものの否定は、最初は有限的な或るものに対立して無限という形で現れる。そして次に、この有限と無限との二規定を含む抽象的対立は、対立を含まぬ無限性、すなわち向自有のうちに自己を解消する」。(一五三頁)

なお『小論理学』によって、これを補足すれば、「否定性は、或るものの形式であって他有としてある。この他有は質そのものの規定であるけれども、最初は質から区別されているから、質は向他有 *Sein-für-anderes* であり、これが定有ないし、或るものの幅をなしている」。すなわち、この他有 *Anderssein* という形式の否定性は、質一般の特殊化された規定として、質そのものの規定ではあっても、それと区別されて、質の向他有、すな

わち、或るものが他のものへ関係する契機ないし面にすぎない。「このような他のものへの関係にたいして、質の有そのものは即自有 *Ansichsein* である」 (§. 91, S. 281) と呼ばれる。ところで、この即自有は、否定性の現れとしての「規定性とは、あくまで異なるものと考えられるかぎりにおいては、有の空虚な抽象にすぎない」 (§. 92, S. 283) ののであって、要するに、ただ有ということ、実在性をもたないわけである。しかしながら、「定有においては、規定性は有と一体をなしており」すなわち実在性であるが、「この規定性が同時に否定として定立されるばあい、それが限界ないし制限である。したがって他有（＝何々でないという否定性）は、定有の外にあって定有と無関係のものと、考えるべきでなく、定有そのもののモメントである。かくて、或るものは、その質によって、第一に有限であり、第二には可変的であって、或るもの有には有限性と可変性とが属する」 (§. 92, S. 283) とところで「或るものは他のものになる。しかし、この他のものは、それ自身一つの或るものである。したがって、これも同じく一つの他のものになる。かくして限りなく続いてゆく」 (§. 93, S. 285)。「この無限は悪しき無限あるいは否定的無限である。というのは、それは有限なもの否定にはかならないのに、有限なものは、あいかわらず再び生じ、あいかわらず止揚されていまいからである」 (§. 94, S. 286)。このようにして賃労働者が、自分の質的規定性において他のものと映ずるものに徐々に変化してゆくこと、たとえば、自分の職場に不満を感じて次々に転職してゆくこと、あるいは不況のために失職させられたり好況におよんで再び就職したりしてゆくこと、この変転の過程において、この変転を無限に繰り返かえしても自分の定有としての質的規定を止揚することなく、自分の社会的実在は、依然として何時までも賃労働者にとどまっている。これが悪しき無限である。

ところで、このばあい、如何に変転しても賃労働者は賃労働者であるということ、賃労働の種類を如何に遍歴

しても賃労働者としての自分の運命をまぬがれないということ、このことを反省して、自己自身を自覚したとき、これを真の無限というのである。すなわち——「或るものは他のものへ移つてゆくことによつて、ただ自身と合するのである。このような移行および他のものうちで、自分自身と関係することが、真の無限である。あるいは否定的に見れば、変化させられるものは他のものであり、それは他のものの他のものになる。このようにして有が否定の否定として恢復させられる。この有が、向自有である」 (§. 95, p. 289)。——賃労働者が、その職種を変化したり、させられたりして、如何に嘆いても周章しても、賃労働者たる自分の定的實在性を棄てえないという生涯の転変を、振りかえつて考えてみると、それは真実の自分でないところの他の自分を追求していたからでなかつたか、もはや他のものに眼を向けずに賃労働者は賃労働者としての自分を守り育ててゆくべきでないか、という反省になる。そして、こういうふうには反省して自分自身に關係したときには、真実の自己を發見したことになるのである。これが向自有である。賃労働者が賃労働者であることを抜けだそうとする努力において、やはり賃労働者として踏みとどまるべきだと自覚することによつて、すなわち、「他のものの他のものになる」という否定の否定の弁証法によつて、賃労働者としての最初の実在性に歸つてはいても、この實在性の質を自分の本来の規定性として自覚する人間性を打ちたてたことになっている。ところで、この人間性を、自己の賃労働者としての實在性において、向自在に打ちたてようとする否定性が、賃労働者なる定有の内在的矛盾を構成するものであった。

このようにして、賃労働者はヘーゲル的カテゴリーとしての向自有によつて把握しえたとするならば、この賃労働者の論理的構造の一層すすんだ規定は、ヘーゲルの向自有と同じく一層すすんだ規定によつて明かにされう

るであろう。すなわち、ヘーゲルによれば、それは次のごとく規定されている。

——「向自有は、自分自身への関係としては直接性であり、否定的なもの自分自身への関係としては、向自有するもの、すなわち一者 *das Fins* である。一者は、自分自身に区別を含まないもの、したがって他者を排除するものである」。したがって、「向自有は、完成された質であり、そのようなものとしては、有および定有を観念的モメントとして自己のうちに含んでいる。向自有は、有としては単純な自己関係であるが、定有としては規定されている。しかし、この規定性は、向自有としては、もはや、他のものから区別されている或るものに、見られたような有限な規定性ではなく、区別を止揚されたものとして自己のうちに含んでいるところの無限な規定性である」 (§. 96, p. 292)。——

そしてヘーゲルは、向自有のもつとも手近な例として自我を挙げている。——「われわれは、定有するものとして、自分がまず他の定有するものから区別され、そして、それに関係していることを知っている。しかし、われわれは、さらに定有のこの拮が、いわば尖らされて向自有という単純な形式となることを知っている。我」というとき、それは無限であると同時に、否定的な自己関係の表現である。人間は、自己を我として知ることによつて、動物から、したがって自然一般から区別されると言うことができる。自然の事物は、自由な向自有に達せず、定有に局限されたものとして常に、他のものに向っている有 *Sein für anderes* にすぎない。——すなわち、賃労働者の実在性としての商品性は、それ自体で自己反省した定有するものとして、商品であり、商品という物であり、したがって、自然物一般と同じく向他有にすぎず、向自有となることの不可能なものである。向自有となるのは、現実には人間だけである。したがって商品が向自有になるということも、事実としては、賃労働

働者という商品における事柄だとせねばならない。賃労働者が賃労働者として、自己の実在性において、弁証法的に反省し、自己自身へ関係し合致するところの否定性が、人間性をいみすると、さきに叙べてきたことも、ここに事実的に明かとなったであらう。

ところで、この否定的なもの、自己自身への関係としての、すなわち、向自有としての人間性は、自己の賃労働者としての定有の「他のものへの拵がり」が、尖らされて自己に帰ったもの」として、もはや人間性一般でなくして、個別的な自我でなければならぬ。他の賃労働者の自我を、すなわち他我を、自己から排除する一者でなければならぬ。すなわち、向自有としての賃労働者とは、或る賃労働者が我として人間性を発見し、自覚したことであらねばならない。この人間性の自覚は、有としての単純な自己関係、すなわち、「我は我であり、自分は自分である」といった単なる表象としての反省でなく、また、他のものから自分を区別するだけの、定有として規定されていても、いまだ真実の自己を自覚していない抽象的な反省でもない。多くの他者との一切の区別を止揚して、何れに迷わされず自己に安住しているような具体的な人間性の自覚である。このようなものとして、「有および定有を観念的モメントとして、自己のうちに含んでいる」のである。すなわち、自己のうちに無限の規定を含んでいるような普遍性であつて、しかも、このような具体的普遍性が一者としての自分の内容となつて、ような自己反省なのである。かかる普遍性をたたえた個別性を個性というならば、この個性の自覚、人間性、一般の个性的自覚、これが、われわれ現実的人間の、したがつて亦、賃労働者の向自有としての在り方である。そして、これが、「向自有の、完成された質である」ということの意味でなければならぬ。

さらにヘーゲルは、「定有は実在性であるが、向自有は観念性と考えられねばならない」と言っている。これ

を逆にいえば、向自有の实在性の契機が定有として質的規定であるにたいして、その否定性の契機は、この有限な質的規定を否定的に成りたためる根拠として、無限な規定性、すなわち観念性である。賃労働者は、自己の有限な实在的定有において、これを個性的に止揚しえた心境を観念的に確保しているかぎり、自己の人間性に向自有であり、すなわち人間性を自覚した賃労働者たりうるのである。——「人々は、しばしば实在性と観念性とを同等の独立をもつて対峙している一対の規定と考え、实在性のほかに観念性もまた存在すると言う。しかし観念性は实在性の外部に、实在性と並んで存在する或るものではなく、観念性の概念は、实在性の真理であることにあり、实在性が即目的にあるところのものとして定立されるとき、それは、観念性として自己を示すのである。したがって人は、实在性が凡てでなく、そのほかに観念性をも認むべきことを承認しただけで、観念性を正當に評価したのだと考えてはならない。实在性と並んで存在するような観念性、あるいは、たとえ实在性を超えた観念性でも、実際は空虚な名前にすぎない。観念性は、或るものの観念性であるときにのみ、一つの内容をもつのである。」（§. 96. Zusatz, S. 293—4）——すなわち、賃労働者が、自己の实在性と異なった観念的な生き方を想像したり、賃労働者としての人間性を超越した人間性一般、すなわち宗教的、芸術的、道徳的、等々の人間性を希求したりしても、要するに自己の外部にある抽象的な観念性、すなわち、いわゆる観念論的なものであるにすぎないのである。賃労働者が、自己の实在性において、この实在性の根拠ないし真理としての人間性をもつたとき、この内容的な自己の實力としての人間性が、向自有としての観念性である。そして、賃労働者が賃労働者として人間でありえているときの、この内容的な観念的人間性において、この自覚的な賃労働者は、同時に、道徳的人間でもあり、ないし芸術的人間でもあり、ないし宗教的人間でもありえているのである。このような完成

された賃労働者としての質的規定性が、向自有としての賃労働者である。<sup>(一)</sup>そして、この向自有としての賃労働者が自らに内在する自己矛盾を自覚するところに、賃労働者の実践的ないし学問的な思惟が始まりうるとするのが、第四の仮定的命題であつたわけであつた。

(一) 本節の前半としての以上の数頁は、本誌第三巻第三号に発表した「賃労働者の向自有的論理構造」第二節の文章と全く同一である。まえに註記して断つておいたとおり、本稿は、わたしの労作過程において右の論文の前に位置づけられるものであるが、その内容が純哲学的なものであるため本誌への発表を遠慮しておいたものであつた。そして、右の論文を發表するさいに、もともと本稿の一部であつた右の数頁を、右の論文に構成上割愛して流用する必要を生じたのであつたが、本稿をここに旧稿のまま發表するにあつて、もとの形態のままで生かすほかなかつた。同一文章を二個所に流用することは、氣遅れする次第であるが、本稿の構成上、何としても書き直しの不可能な分析的叙述であり、以下の分析的叙述の前提になる部分なので、敢てこれを犯した。読者の諒恕を得ておきたい。

さて、このように自覺的な賃労働者の向自有としての論理構造は、果して論理的ないみで端緒にあたひしうるのであろうか。向自有はヘーゲルにおいても、定有から媒介された複雑な規定性にあるものである。さらに、この定有も有から媒介された諸規定の綜合である。ただ、この純粹有のみは、無規定、無内容であり、したがつて無媒介であり、すなわち純粹思惟にとつて直接的であるから、それが純粹学としての「論理学」の端緒でなければならぬとするのが、端緒を發見し定立するためのヘーゲルの方法論的手続きであつた。しかしながら、マルクスの『資本論』の現実の体系的叙述においては、対象的實在としての商品から始まつている。そして、この商品は、規定された有としての定有である。そのかぎり、われわれとしては、せめて定有のカテゴリーにまで遡つて、そして、ここに踏みとどまらねばならない。ところで定有としての商品は、物としての商品であつて、それ自体と

して思惟することは不可能な自然的実在である。物としての商品が人間の思惟を媒介するとき、すなわち、われわれが商品の研究の対象として定立するとき、科学的な分析的思惟の端緒としての資格をもつにいたるであろうことは、『資本論』の叙述が事実によつて示してはいるが、「論理学」的には、これも端緒としての資格を備えているとは言えない。なぜならば、このばあいには、すでに対象と意識との関係を前提しており、商品としては人間の思惟を媒介しており、分析的思惟としては物としての商品を媒介しているからである。われわれとしては、今のばあい、ヘーゲルの主張のとおり、端緒は、純粹に直接的でなければならぬのである。かくして、物としての商品と思惟する人間との直接的な同一性こそは、われわれの定立しうべき『資本論』の本来の端緒であろうとしてきたのが、前節における第一の仮定的命題から出発した全論理的操作であった。ところで、この第一命題の具体化において変態された第四の命題の指示するところのものは、「自覚した賃労働者の内在的矛盾が学問的思惟の端緒になりうる」ということであつた。にもかかわらず、自覚した賃労働者の論理構造を表現するカテゴリーは、向自有であり、この向自有は、複雑な諸規定の総合として、端緒としての論理的資格をすでに喪失している。このディレンマに、われわれはいま直面しているのである。しかも、われわれとしては、もともと気づいていたこのディレンマを避けるため、定有としての対象的商品にまで遡つて、直接性の規定を適用してきたかぎりでは、再び、このディレンマに帰つてきたのであつた。この悪循環のディレンマは、如何にして克服しうるか。

ところで、この悪循環は、『資本論』の現実的叙述が指示するがままに引きずられて、定有のカテゴリーにまで遡源し、対象的な物としての商品のみが論理的にこのカテゴリーに妥当するという普通の理解にわれわれの意識がなお囚われていることに拠るものでないであろうか。上述の変態されてきた第四の仮定的命題の指示するとこ

るのものは、定有的端緒が、物としての商品でなく、商品としての賃労働者であるべきだということであった。とすれば、この賃労働者を論理的に完全に表現したカテゴリーとしての向自有を、分析的に抽象化して、賃労働者の定有にまで遡るべきでなかったか。この向自有が、賃労働者の自覚的な姿であったとすれば、その定有としての前段階のカテゴリーの表現するものは、未だ人間性を自覚するにいたっていない賃労働者の姿でないであろうか。このことを確めるためには、再びヘーゲルの定有の論理構造を吟味するほかないであろう。しかし、今度は、向自有から分析的に遡源するという仕方、すなわち定有にまで遡源するように向自有に綜合された諸規定を一つ一つ捨象してゆくという手続きで、それは、なさねればならぬ。

このことは困難でない。賃労働者の定有形態が、その無自覚の状態をいみするとの見当からして、その向自有の形態における賃労働者をして自覚的ならしめている論理的モメントを、一つ一つはずしてゆけばよいからである。さて、賃労働者が自覚的であるということは、その人間性の個性的自覚のことであり、これは向自有の否定性の自己反省による積極的な定立であり、このことによるところの、自己の実在性としての商品性にたいする対峙的姿勢としての否定的人間性の自覚、すなわち、自己自身における内在的矛盾の自覚のことであった。であるかぎり、否定性自体の自己への関係としての自己反省の契機を向自有の概念から先ず捨象すればよい。しかし、ここに捨象するといつても、機械的に切り棄てるのではなく、自己反省をしなかつた以前に溯るのである。すなわち、賃労働者に人間としての自覚の未だなかつた状態を、われわれが目前に定立するのである。そして、これを観察する。そうすると、この賃労働者は、もはや人間性の自覚がないものとして、われわれに現れている。しかし、それは、すでに自覚していた以前の無自覚であるから、この無自覚は未自覚でなければならない。すなわ

ち、未だ自覚していないだけのこと、自覚の可能性は十分にもっている。これを論理的カテゴリーで言えば、否定性の自己自身への関係は捨てられたが、否定性は勿論、その自己関係の可能性も残している、すなわち自己反省しうる否定性を確保している、ということになる。ところで、賃労働者が未だ人間性を自己の実体として自覚せず、内在的な自己矛盾を未だ自覚していないということは、一体、現実は何をいみしているだろうか。それは言うまでもなく、自己の労働力の商品化のほかに生活が不可能であることに矛盾を感じないで、好況不況による就職失職を運命的に諦め、ただ転職その他によってのみ運命の打開を試みるころの、悪しき無限のうちにあることであり、他の多くの同じ賃労働者とは、相互に人格として承認し合っている、未だ真実の個性としての人間性において結合し、団結することのないところの、賃労働者の姿であろう。とすれば、賃労働者としての自己の商品的実在性にたいして批判的な人間性、すなわち、この否定的な観念性を、微塵も心境に浮べることのない姿が、無自覚ということの極端において想定しうるものであろう。

このばあいこのカテゴリーの論理構造は、否定性が、否定性として直接的に自己定立することは、もはや全く無くなっているとせねばならぬが、しかし、時々自己の人間性を守るべきに気付き、自己矛盾を心中に感ずるといような賃労働者の、なお未自覚的な前段階を想定するかぎりでは、論理的カテゴリーにおいても、否定性は、その否定性としての可能性をもって何処かに潜んでいるとするほかはない。ところでヘーゲルは、「否定性は、有と直接的に同一であり、そして、このような否定性こそ、われわれが限界と呼ぶものである」(S. 92. Zusatz, S. 283) と、定有に關して述べている。そして、さらに続けて、「或るものは、その限界内においてのみ、また限界によってのみ、現にそれが有るようなものである。したがって限界は、定有に単に外的なもの

と考えらるべきではなく、それは定有の全体を滲透しているのである。限界を、定有の単なる外的規定と考えるのは、量的限界と質的限界と混同していることに、もとづいている」 (§. 92)。ところで、「限界ないし制限とは、否定として定立された規定性のこと」であつた。すなわち、「否定性は、全く無くならないで、一つの定有および或るものとして、或るものの他有、すなわち、その形式として有る」。——とヘーゲルは論述している。すなわち、質的規定性の即自有にたいする向他有が、潜んでしまった否定性の変つた姿である。それは「或るものの幅あり」 (§. 91, S. 281) 定有するもの相互間の関係であり、定有の可変性と有限性とであり、悪しき無限の根拠でもある。このようにして、否定性は、質的規定性のうちに潜んでしまつたが、しかし、なおこの質的規定性の即自有には否定的に対立しているのである。ここに、われわれは、否定性が否定性として積極的に自己定立する可能性を未だ喪つていない、とすべき理由を見なければならぬであらう。ところで「質的規定性の即自有とは、有の空虚な抽象にすぎず」 (§. 92 p. 283) その向他有として形式のゆえに、質的規定性は、質的規定性として、すなわち定有の実在性としてあることをうるのであるから、この実在性が実在性としてありうるのも、否定性を根拠としているからだとせねばならない。しかし、ここでは、この否定性は、否定性として実在性の根拠であることは棄てられて、否定性は、否定性としてでなく実在性の幅として、すなわち、実在性そのものの向他有的な拡りとして、その根拠をなすのである。すなわち否定性は、このばあい、実在性と同一のものになつてゐる。実在性に限界をおくものとして、それと対峙しながら同一である。すなわち、区別における同一性であり、逆に同一性における区別の関係にある。(ii) ところでこの関係は、ヘーゲルの反省諸規定の論理的展開においては、その最高の段階に位置づけられている矛盾の関係にまで、発展する弁証法の最初の反省規定であり、すなわち矛盾関

係の芽萌えであり、したがって、自己矛盾の端緒的形態でなければならぬ。

(一) 『小論理学』二八三頁の叙述が参照されるべきである。

(二) すなわち、この区別は、有の段階における有と無との外的な差別であったものであるが、それが成として動的に統一され定有の内容として规定的に定立されたものである。成は有と無との統一としては、すでに有と無とを自己の契機とする全体であったはずであるが、有の段階においては、この全体は未だ規定されていない即自的なものにとどまらざるをえなかつた。これについてヘーゲルは次のごとく方法的な注意を与えている。——「全体は有の形式、言いかえれば、有という規定性のなかにあるものとしても、同じように一個の止揚された全体、否定的に規定された全体である。けれども、このばあい全体は、われわれの反省のうちで、すなわち、われわれに対して然るものであるにとどまり、いまだそれ自身において、そのように定立されているのではない。しかしながら、定有の規定性そのものは、定立された規定性であつて、それは定有という言葉のうちに、すでに含まれている。それ自身において定立されている規定性と、反省的に定立された規定性との、この二つのことは、つねは厳密に区別されねばならない。ただ概念それ自身のうち定立されたもののみが、概念の展開の考察にさいして、その内容となるもので、これに反し未だそれ自身のうちにおいて定立されていないような規定性は、われわれの反省の仕事である。しかもこの反省が、概念の性質に適合しているか、あるいは、ただ外的な比較にすぎぬものかは、問題外である。そして、この外的反省の対象になつていような種類にぞくする規定性に、注意が向けられるとしても、それは単に概念の展開それ自身のうちで啓示されるところの経過を、説明し予告するに役だつただけである。ゆえに全体、すなわち、有と無の統一が、有という一面の規定性のうちに存するとするのは、一個の外的反省のしわざである。けれども、この統一は、否定すなわち或るものと他のものなどのうちにおいて、はじめて定立された統一として存するにいたるであろう。」（一五五頁）——ヘーゲルのこの言葉によつても明かなように、全体は、实在性と規定性との区別として、定有のうちに始めて规定的に定立され、そして、これが定有一般の内容をなしているものである。

このような論理的内容をもったカテゴリーが規定された有としての定有の全体性であり、この論理的内容が定有の内的規定としての限界であったわけであるから、無自覚的な賃労働者の論理的構造も、また、自己矛盾の萌芽的形態を秘めたかぎりの質的規定性にある有としての定有でなければならぬことになる。このようにして、われわれは、ここに賃労働者の無自覚の状態の論理のカテゴリーが定有であろうと想定してきたところの、その目的も達成したわけである。

——(本稿未完)——